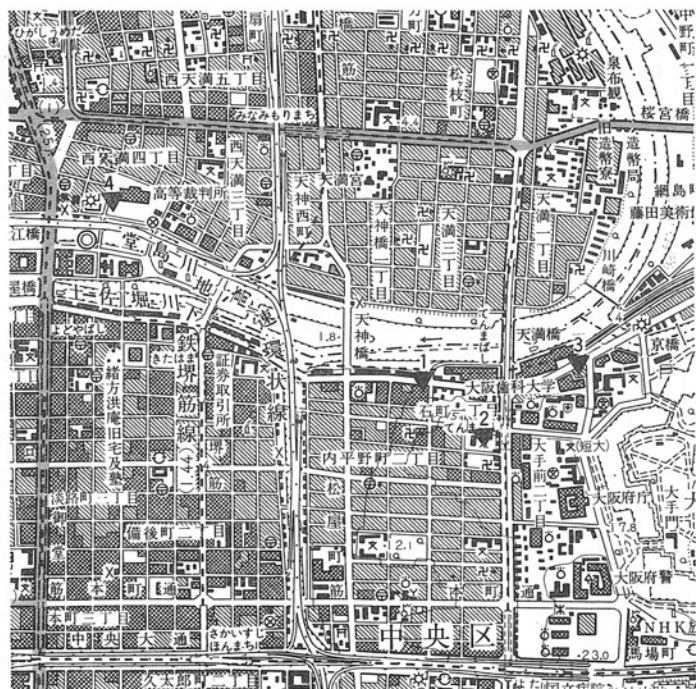


## 大阪・大坂城跡

- 1 所在地 一 大阪市中央区北浜東二丁目、二 中央区釣鐘町一丁目、三 中央区大手前一丁目、四 北区西天満二丁目
  - 2 調査期間 一 一九九〇年(平<sup>2</sup>) 四月～五月、二 一九九〇年七月～十一月、三 一九九〇年八月～十一月、四 一九九〇年九月～十一月
  - 3 発掘機関 勅大阪市文化財協会
  - 4 調査担当者 一 松尾信裕、二 伊藤 純、三 黒田慶一、四 中村博司
  - 5 遺跡の種類 城郭跡・城下町跡
  - 6 遺跡の年代 桃山時代～江戸時代
  - 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要  
一九九〇年度の調査で木簡が出土した調査は五件である。この内、一件については未整理のため、残り四件について報告する。  
一 豊臣氏大坂城跡(OS九〇―二〇次調査)
- この調査地は、豊臣期大坂城の北端を東西に横切る京街道(現土佐堀通り)に面している。OS八八―一―三次調査地(『木簡研究』一二に大坂城跡(3)調査地八として報告)の東二〇mにあたり、その調査地



(大阪東北部二万五千分の一)

と同様、今回の調査地も京街道に面した町屋と推定している。敷地の背後(南側)には比高一〇m余りの崖がそびえ、石垣で覆われている。

検出した遺構面は二面あり、上位面には、敷地の奥でその背後にあったであろう石垣の転石が散在していた。上位面の時期は豊臣後

期（およそ一五九〇～一六一五年の間）と推定している。

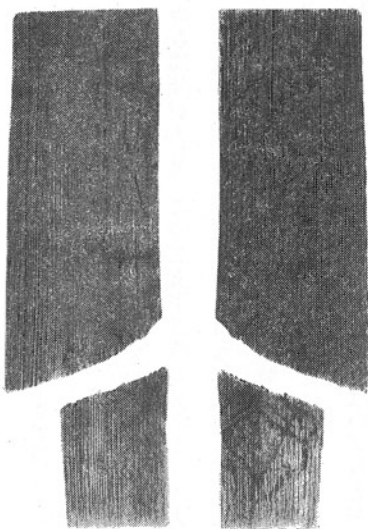
下位面には、京街道に面する方に南北棟礎石建物、その奥に土蔵（？）があり、他に地下式穴蔵・溝などを検出した。これらの遺構に伴う遺物には、国産の瀬戸・美濃の他、中国製の白磁や染付皿・朝鮮李朝期の壺・ベトナム製の白磁皿などがある。総じて豊臣前期（およそ一五八三～九八年の間）に属すると考えられる陶磁器群である。

## 二 徳川氏大坂城下町跡（OS九〇―五〇次調査）

南から北に延びる上町台地上の北端の高所に調査地は位置している。直前まであった建物の基礎による攪乱が多く、しかも、台地上のためかなり削平されており、近世の遺構はゴミ穴一基と柵列のみである。多くは古代の遺構で、七世紀後半の建物と井戸、八世紀後半から末頃の七棟の建物と井戸、これらを区画するような東西方向の溝、九世紀頃の建物などが検出された。

遺物としては、八世紀後半から末頃に使われたと思われる井戸（厳密には九世紀の初頭に埋められている）から、「厨」「浄」「万女器」と墨書された土師器の杯や、馬形と思われる形代が出土している。また、この井戸や周辺の遺構から蓮華文軒丸瓦や重圈文軒平・軒丸瓦、拒鵲鴟尾などが出土しており、近辺に寺院や官衙の中心となるような建物があったと推定できる。

木簡は、江戸時代のゴミ穴から六点出土した。このゴミ穴は、出



土した伊万里焼から一八世紀に埋められたことがわかる。先に述べたように、遺構面が削平されているため、このゴミ穴がどのような性格の施設に伴っていたのかはわからない。なお、同じ遺構から、表裏に沢瀉の絵を墨描きした木片も出土している（右図）。

## 三 豊臣氏大坂城跡（OS九〇―五八次調査）

調査地はもと、淀川（現、大川）と大和川（現、第二寝屋川）の合流点南岸に位置し、昭和初期の区画整理事業に伴う河川改修で徳川氏大坂城外郭石垣（江戸時代初期の元和六年〔一六二〇〕頃築かれて以来使われていた）が埋められるまでは、川に臨んだ地であった。

この石垣の面から一五m南に、豊臣時代の土囊積みの岸壁があり、文禄三年（一五九四）の惣構普請によるものと思われる、この江戸初期に埋められた一五mの範囲も、豊臣時代には河川敷であったことが

判明した。木簡二点はこの河川敷の水成層から、柄の折れた刀や青花・瀬戸・美濃・備前などの陶磁器とともに出土した。

#### 四 佐賀藩大坂蔵屋敷跡船入遺構（OS九〇―七五次調査）

江戸時代を通じて、大坂には西国大名を中心とする諸藩の蔵屋敷が立ち並んでいた。そのほとんどは水運の便の良い堀や川沿いに設けられたが、なかでも大川（旧淀川）に臨む一帯には石垣造りの船入（ふないり）の施設を備えた大藩の蔵屋敷が集中していた。佐賀藩の蔵屋敷は、この大川に臨む蔵屋敷のなかでも取りわけ大きなもの一つである。

この佐賀藩蔵屋敷がいつ頃、どのような経緯で設置されたかは今一つ明らかでないが、明暦元年（一六五五）の『大坂三郷町絵図』に描かれていることから見て、江戸時代もかなり早い時期から存在していたことがわかる。その後、貞享・享保・寛政年間などに大きな改変を受けたが、貞享以降敷地規模には変化のないまま明治時代を迎えている。そして、明治四年の廃藩置県後は徴役場、ついで大阪控訴院、さらに大阪高等裁判所となって今日に至っている。

ところで、佐賀藩蔵屋敷の場合、船入は屋敷内の南西部に設けられており、平面形は南北に細長いほぼ羽子板形を呈している。その南端は水門を開いて大川に通じ、一方北部すなわち奥は一段と幅広く、荷揚げ場が設けられていて米穀を始めとする物産の積みおろしが行なわれたところである。今回の調査地はこの船入の南半部に相

当するが、発見された石垣はすべて上半部が明治以降の工事で失われていた。木簡を含め遺物は、その大半が攪乱土層内から発見されたものである。

#### 8 木簡の釈文・内容

##### 一 OS九〇―二〇次調査

(1) ・「」むき


・「」

や

より

四郎左衛門尉 参

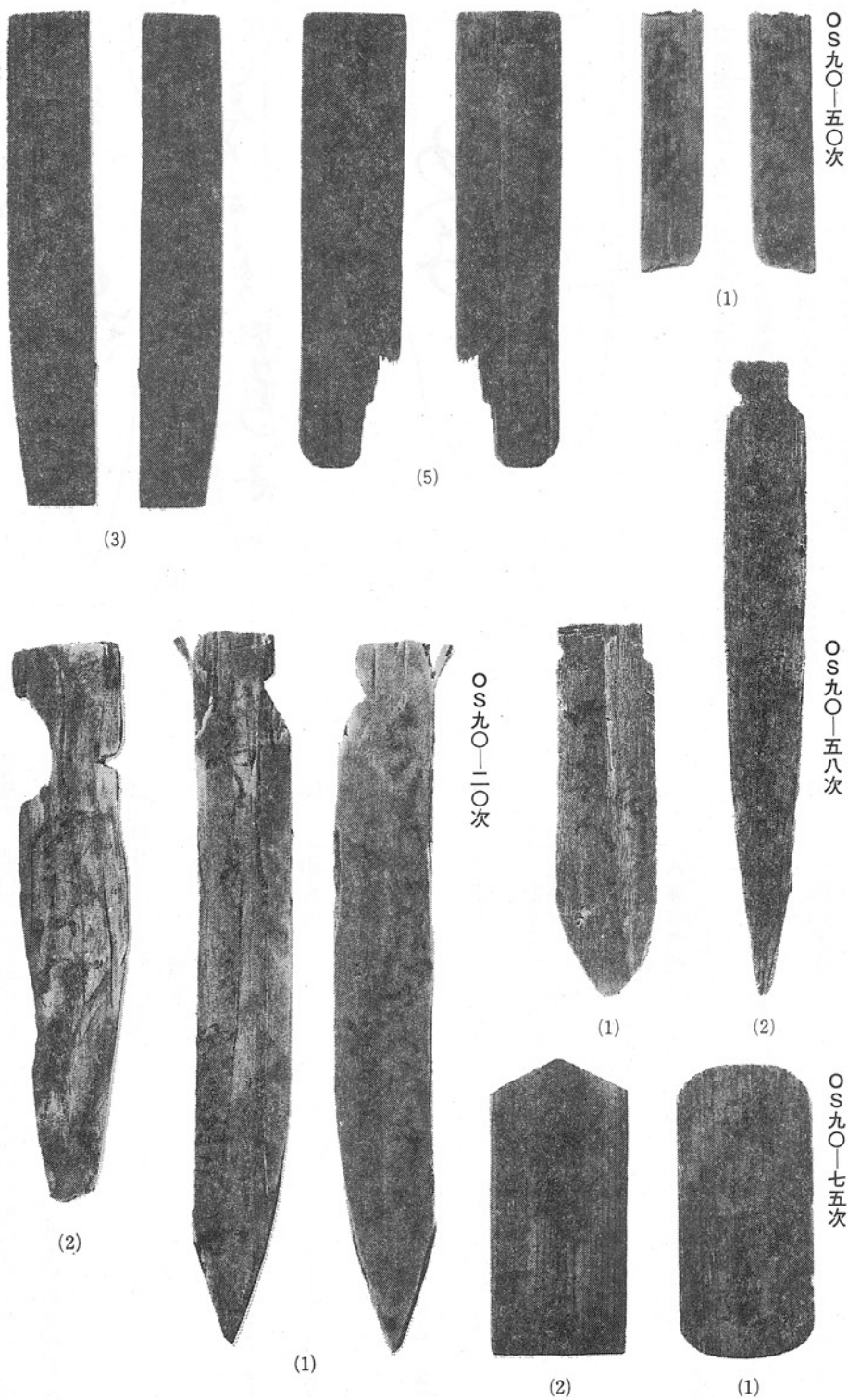
195×(27)×5 033

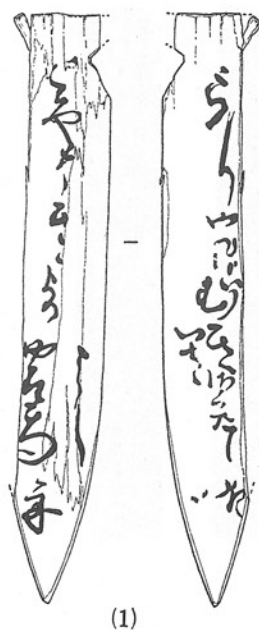
(2) 「」参

153×29×7 033

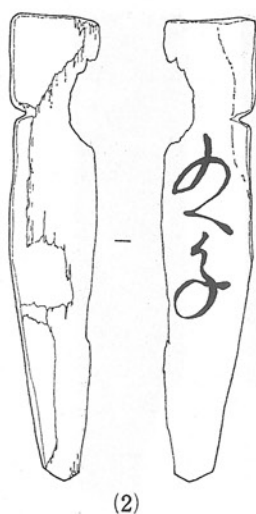
五点の木簡が下位面の遺構から出土した。そのうち判読できたものは二点である。

(1)は礎石建物の南にあった溝から出土した。表には「むき」と読める部分がある。この二文字は他の文字よりも大きく書かれており、麦の意であろうか。裏には差出人と思われる人名が読める。(2)と他の三点は土蔵と推定される建物内から見つかった。(2)は差出人の名前があったであろうが、判読できない。他はいずれも墨痕のみで判読できなかった。判読できた木簡はいずれも荷札木簡であった。





(1)



(2)

京街道に面するこの調査地付近では、他にも木簡が出土した調査地がある（『木簡研究』二一 大坂城跡〔調査地七・八〕）。それらで出土している木簡もすべて荷札木簡であることから、この調査地付近の京街道沿いには町屋が軒を並べていたことを推測させる。しかし、

物構内の北西端の京街道沿いには武家屋敷が確認されており、街道が城内に入った所には、城内の警護のためか、武家屋敷を配置していた可能性がある。

二〇五九〇—五〇次調査

- (1)
- ・  
「  
□  
衛門  
□<sub>殿</sub>  
□<sub>参</sub>  
」<sub>力</sub>

川原

72×17×3 011

- (2) 中×

(51)  $\times 19 \times 3.5$  019

- (3) 「西越村十善」

134.5×22×3.5 011

- ・「中村□二郎 納」

- (4) 二郎吉

「吉やう□すかり  
二郎吉みそ」

125×25×2.5 011

- (5)

川庄や

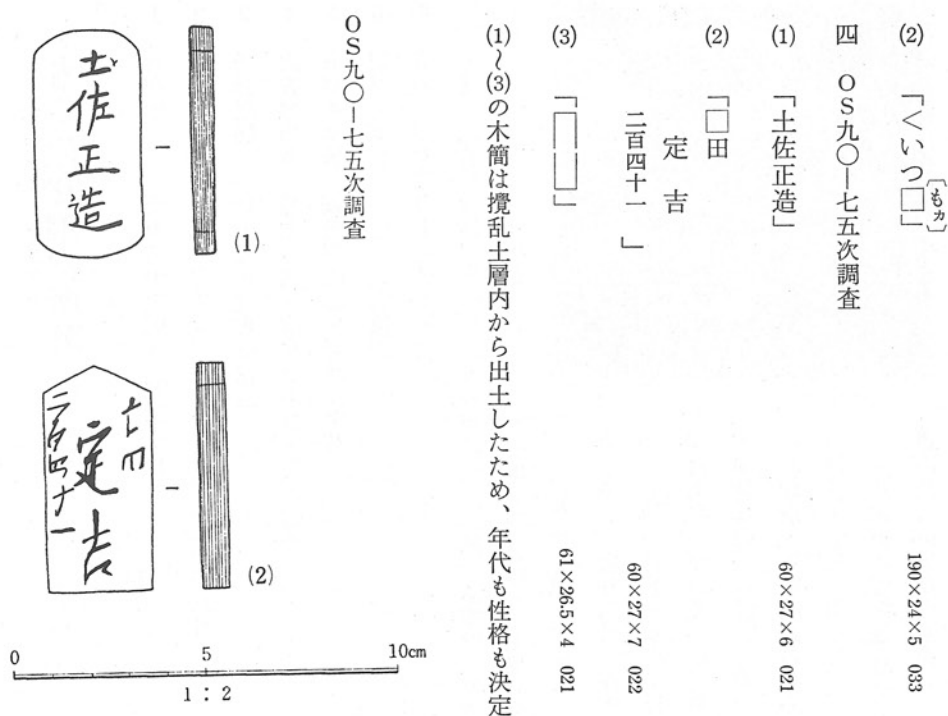
(123.5)  $\times 28 \times 4$  019

- □ □ □ □ □  
八郎右衛門カ

三 OS九〇—五八次調査

- (1) 「く四郎兵衛」<sup>みし</sup>□

112×30×3.5 033



しがたく、一八世紀中葉～一九世紀後葉の鑑札のようなものと推定されるだけで、詳細は後考を俟たざるを得ない状況である。

今回紹介した四カ所の木簡出土地の内、一～三は豊臣時代の大坂城内に相当する。いずれも大坂城の本丸から見て、西方向にあたり、文禄三年（一五九四）に築造された惣構の一画を占める場所である。

ただ、出土木簡の年代は、一が豊臣前期、二が江戸中期、三が豊臣時代と区々であって、豊臣時代の大坂城に関わる可能性のあるものは、一と三のみである。また、これらの木簡の性格については、一の(1)(2)、二の(1)(3)が荷札木簡かと推定できる他は判然としない。

一方、四はこれまで大阪市域では発掘調査の対象とならなかった江戸時代の蔵屋敷跡であり、木製遺物の出土も期待されたのであるが、上述のとおり、近代以降の攪乱が激しく、木簡も三点出土したにすぎなかった。

#### 9 参考文献

伊藤 純「西成郡美努郷の一隅」(勸大阪市文化財協会『葦火』三〇一九九一年)

(一) 松尾信裕、二 伊藤 純、三 黒田慶一  
(四) 中村博司、釈文 鳥居信子